



初診時におこなう検査

□1 血液型（ABO 式、Rh 式）

Rh(-)の女性が妊娠されたときに流産や子宮外妊娠などがあった場合や分娩後、次回妊娠時の胎児への影響を防ぐため必要な処置を行うことがあります。

□2 子宮頸がん検診

子宮頸がんはある程度進行するまでは症状があらわれにくいといわれています。初期の段階で発見されれば子宮を温存することも可能です。発見が遅いほど治療が難しくなり、治療後の妊娠にも大きな影響を与えてしまうため、1年に1回の検診をおすすめしています。

□3 風疹抗体

妊娠初期に妊婦が風疹に感染すると胎児に先天性風疹症候群を引き起こすことがあります

□4 麻疹（はしか）抗体

妊婦が麻疹にかかると重症化したり流早産しやすいといわれています。

風疹・麻疹抗体価検査で感染が疑われる場合には自動的に追加検査を行います。後日料金が加算されますので、ご了承下さい。

□5 クラミジア検査

性感染症の中では多いのですが、自覚症状が乏しいため放置されやすい病気です。子宮頸管炎から感染が進行すると卵管炎などを起こすこともあり不妊の原因となる可能性があります。また妊娠中に感染すると流早産の原因や赤ちゃんへの感染も起こすことがあります。

□6 TSH（甲状腺刺激ホルモン）

甲状腺機能の指標となります。甲状腺機能に異常がある場合、不妊の原因となったり、流早産のリスクとなったりすることがあります。この数値に異常がある場合には内科に紹介します。

□7 ビタミンD

ビタミンDが充足されている女性は、不足または欠乏している女性より臨床的妊娠率や生産率が高いという結果が報告されています。またビタミンDは着床にも関連していると考えられているため、結果によってはサプリメントの内服をおすすめしています。